チェンマイ日記①

タイへの第一歩

はじめに

私は、国際協力事業団（ＪＩＣＡ）のプロジェクト技術協力の一員として、1984 年１月から約３年間、タイ国チェンマイに派遣された。一緒に派遣された各専門家が、それぞれの分野で残した技術の小さなタネは今後大きく成長することであろう。

「業務調整」担当（注：プロジェクトの事務局長的なもの）であった私は、文化・習慣・社会環境の違う異国での生活を日記風に書いてみた。見たり・聞いたり・感じたり…素直にそして好奇心一杯に・・・

派遣前

ＪＩＣＡの専門家としてタイ国に派遣されることは半年前から分かっていたが、案外ノンキにかまえていた。12 月になると約１ヶ月間の派遣前研修が始まった。海外生活での心構えや技術協力の意義、そしてその半分・２週間は現地語、すなわちタイ語の勉強である。

そろそろこの頃から忙しくなってきた。予防注射は何と何を、何日間の期間をおいて何回打たねばならぬ、それも親子５人ゾロゾロと。パスポート用写真、資料や書籍リストの作成、歯の治療、子女教育の情報収集などでモタモタしたら年が明けた。餅などゆっくり食べている暇はもう無い。持参荷物の準備、食料品はスーパーマーケットでまとめ買い、電気製品は無税のものを、運送屋を読んで送る手続き。国際運転免許証への書き換えや一応転勤なので挨拶状をあわてて書く。お金も無くなり共済組合に行って借用手続き、電話の一時預かり準備、電気・ガス・水道のストップ。あァー忙しい。まだまだある。子どもの学校への挨拶や成績証明書もらい、区役所に行って住民票の取り消し。その間にはタイ語の勉強もしなければならないし、カッカして夫婦喧嘩もしなければならなかった。

タイへの第１歩

1 月 26 日、東京エアーシティターミナルで多くの方々の見送りを受け、成田空港では今まで着ていたオーバーやセーター親子５人分を田舎の両親の所へ送る。東京―バンコク間は２時間の時差、直行便だと約６時間で到着。案外近いものだ。

７・５・３歳の子供を連れてタイ国・ドムアン空港に一歩降りた途端、数時間前の真冬からサウナ風呂へ入ったような感じ。じっとしていても汗がにじんでくる。さて、入国管理事務所。子ども達は飛行機の長旅で疲れグズグズ言い始める。列は長い。カッコ良いよ

うにと思い背広なんか着ているものだから汗はダラダラ。頭はカッカッ！長時間かけてやっと終わったら今度は税関。手荷物１人 40kg まで無料なので欲張って５人分 200kg 近くを持ち込んだ。ふうふう言いながら手押し車で山のような荷物を押して行く。こちらの運が悪いのか、税関職員が職務に忠実なのか「開けろ！」と言う。しぶしぶ開けると中から出てくるものは漬け物類、インスタントカレー、シャツや下着類、余りにも多いものだから税関職員から「あんたはバンコクで第二のタイ大丸でもオープンするつもりかネ？」と冷やかされる始末。子どもは泣く。女房はオロオロ。汗はダラダラ…

安堵と困難

やっと終わり出口に向かうと、他の林業技術協力の林野庁出身の顔見知りの人達。ここらになるともうベルトコンベアー式で「こっちこっち、車はこれこれ」「奥さん！こっちこっち」。荷物がどこに積み込まれたのか、女房や子供が誰の車に乗ったのか、どこに連れていかれるのか、出迎えの人達の親切で気が付いたらバンコク市内へ行く高速道路。やっと落ち着き「南国はやっぱり暑いですねぇー」と問いかけると、「イヤー今は１年中で最も過ごしやすい時期ですヨ。これで暑かったら４月の一番暑い時期は過ごせませんよ。」と説明された。こちらは返す言葉もなくダンマリ…。

40 分程してやっと到着し着いた所はアパートみたいなところ。このゲストハウスの受付で迎えてくれた人たちが、予約だどうだとか、部屋がるとか我が家族のため押し問答。別館３階の一部屋をキープして一件落着。

出迎えの人達が帰った後、女房は子どもを連れて３階へ。私は１階に置いたに餅が気になる。「東南アジアでは物は盗む人より盗まれる人が悪い」と聞いていたので、30～40kg ある荷物５個を一人で運び始めた。汗をかきかき、フーフー言いながら…。３個目を運んだら女房が何かを叫んでいる。「おとうさ～ん、ここは水が出ないワヨー」まさか？「それはシャワーだけだろう。手を洗う所はどうだ？」重い荷物を汗ダラダラで運んでいるし頭はカッカッしている。「やはりどこも出ないワヨー」。えッ！３階は断水？もうへなへなと座り込みたい気持ち。疲れて動けない。「シャワーを浴びなくてもいいじゃないか！明日まで辛抱しよう！」、「普通の時だったらいいけど、今日はアレなのー、もう気持ち悪くてどうにかしてヨー」。私もタイヘン、女房もタイヘン。

うす暗い受付で、頼る人は誰もいなく下手な英語で再交渉…。満足な部屋を確保し、シャワーを浴び着替えの下着を着けた時、時計の針は午前１時を指していた。と言うことは東京は夜中の３時か、とにかく長いながい一日であった。そして親子５人無事（？）タイ

国へ第一歩を踏み出した日でもあった。